

⑯ 日本国特許庁 (JP)

⑮ 特許出願公開

⑰ 公開特許公報 (A)

昭55—35025

⑯ Int. Cl.<sup>3</sup>  
A 61 K 9/08  
31/60

識別記号  
ADB

府内整理番号  
7057—4C  
6617—4C

⑯ 公開 昭和55年(1980)3月11日  
発明の数 2  
審査請求 有

(全 2 頁)

⑯ 液状水虫治療薬及びその製法

⑰ 特 願 昭53—108096

⑰ 出 願 昭53(1978)9月5日

⑰ 発明者 太田頭

東京都渋谷区上原一丁目45—4

クボタハウス202

⑰ 出願人 太田頭

東京都渋谷区上原一丁目45—4

クボタハウス202

⑰ 代理人 弁理士 高木六郎 外1名

明細書

1. 発明の名称

液状水虫治療薬及びその製法

2. 特許請求の範囲

(1) 分子量8000ないし5000のポリエチレングリコールと、分子量800ないし500のポリエチレングリコールとのほぼ等量づつを混和し、これに該混和物の重量を基準にして約80重量%までの量のサリチル酸を添加して加温溶解し、更にこの全重量を基準にして約10重量%のエタノールを添加して成る液状水虫治療薬。

(2) 分子量8000ないし5000のポリエチレングリコールと、分子量800ないし500のポリエチレングリコールとのほぼ等量づつを混和し、これに該混和物の重量を基準にして約80重量%までの量のサリチル酸を添加して加温溶解し、更にこの全重量を基準にして約10重量%のエタノールを添加することを特徴とする液状水虫治療薬の製法。

3. 発明の詳細な説明

本発明は水虫治療薬に関する。更に詳しくは本発明はサリチル酸を80重量%までの高濃度で含有する常温で液状のアルコール含有量の少い水虫治療薬に関する。

水虫治療薬として従来多数のものが提供されて来たがその効力において決定的なものは未だ現われず、多くの患者から特効薬の出現が熱望されている状態である。

サリチル酸が水虫に著効を有することは従来から知られており、これまでアルコール溶液または軟膏として用いられて来た。

しかしながらアルコール溶液は患部に対して刺戟性であり、特に患部がびらん状態にある場合には患者に耐え難い苦痛を与える程である。またアルコールは揮発性であるので、この溶液を患部に塗布した後にアルコールが蒸発し、サリチル酸が結晶状態で析出する。この結晶状態のサリチル酸は皮膚内に浸透せず、治療作用を發揮しない。この現象は濃度が高い程顕著であり、したがつて高

誤認溶液としてサリチル酸の効果を十分に發揮させることができない。

軟膏は刺戟作用は少ないけれど、湿润性の患部には不適であり、油性のため衣服等を汚し易く、患部も不潔になり易い。また液状の場合と比べて効力が低い等の欠点を有する。

本発明者はサリチル酸を主剤とする水虫治療薬について脱意研究した結果、特定の軟膏基剤によりサリチル酸が液化することを見出した。しかしてこの場合サリチル酸の含有量により、気温が或る温度、例えば18°C以下になると白濁する現象が生ずる。そこで本発明者は更に少量、約10重量%のエタノールを添加することにより、この白濁を防止し得ることをも見出した。斯くて本発明者は上述のサリチル酸製剤の諸欠点を克服した極めて有効なアルコール含有量の少い液状水虫治療薬の製造に成功したのである。

すなわち本発明は、分子量8000ないし5000のポリエチレングリコールと、分子量800ないし500のポリエチレングリコールと

のほは毎量づつを混和し、これに該混和物の重量を基準にして約80重量%までの量のサリチル酸を添加して加温溶解し、更に、この全重量を基準にして約10重量%のエタノールを添加して成る液状水虫治療薬及びその製法を提供するものである。

本発明の水虫治療薬は無色透明の、やや粘稠な液体であり、これを患部に1日2~3回塗布するのであるが刺戟性は殆んどなく、乾燥性、湿润性いずれの水虫にも極めて顯著な効果を有する。

下記に臨床例を示す。

症 状	治 療 人 数	治 療 日 数	完 治 人 数	未 完 治 人 数	備 考
軽 症	80	7日~10日	80	0	
比較的重症	5	80日	5	0	
重 症 (十年以上 の歴史)	5	約6ヶ月	4	1	未完治患者 の症状もか なり好転

特許出願人 太田 頭  
代理人 高木 六郎  
代理人 高木 文生

4